

逍遙点描

— 絵と文・中嶋嶺雄 —



タリンの街並み

今日、バルト三国が揺れている。なかでもエストニア共和国では、首府のタリンを中心に人民戦線が結成され、民族自立の運動が高まっている。

私がタリンを訪れたのは1976年の冬であったが、古い街並みを丘のうえから一望したときの光景が忘れられない。そこここに教会の尖塔や丸屋根、城壁、家並みが建て込みながらも、全体がすぐれて調和的で屋根や壁面の緑、茶、ベージュの色彩が美しくミックスしていた。

町の中心にはドイツの商人に支配された14～15世紀以来のハンザ同盟の商業都市の面影がそのまま残っており、広場の一角や小路の店並みはチェコのプラハやタボールを想わせる。ソ連でもっとも西欧化された小都市だといわれるが、街行く人びとも垢ぬけている。

プロテスタントの教会だという丘のうえのキリク教会に入ると、素朴な室内ではあるが、老婆が二人いて蠟を点し、たまたまパイプ・オルガンが「歓びの曲」を奏でていて、心の芯にまで響くようであった。  
(東京外国語大学教授)

ASIA MONTHLY

# 東亞

1989

# 10

No. 268

**〔中国近代化への道〕**

知識人と政治 — 嚴家其の場合 —

毛里和子

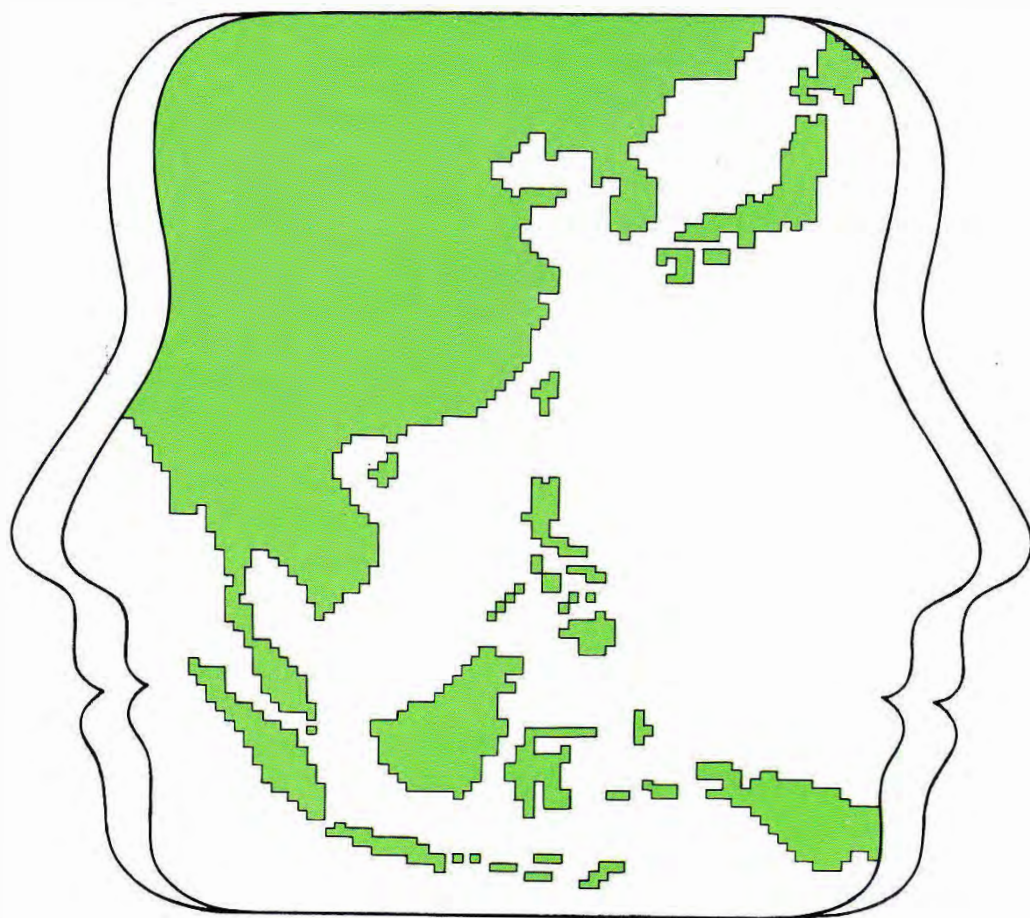
中国における地方政府の経済的機能

杜進

**〔講演記録〕**

中国の動乱と情報

大野静三



KAZANKAI